



9
30
1
2
3
4
5
6
7
8
9
40
1
2
3
4
5
6
7
8
9
50
1
2
3
4
5
6
7
8
9

9
2067
8

門 〇七九
瑞 2067
卷

十卷ノ目

松屋宗

續人名卷九 女中の巻

釈法忠

一 女は貞義賢孝の道あり先づの貞と
つ六一はびまは嫁して心とかうして
他とあつりはまはと大切は教ひまはひのど
私とまてまのこめとあひまおらうおはま
あふし守はとそして心よそむいぬまの
よかひひうしあやまらうとつこのひかん



とふしとてゆく人支理不足は折檻する
とて是れとてしむに却てとて夫へ侍る事
とてとて成進しとてのれと責て家業とい
とてとて娘かつふとてとて恨しとてよく
心とて愛せしめてあまはまよとてとて成貞女
とて中作之又義とてとての志とてとて
かともまうとては返も侍るととてとて家富
とてへも奪す人と約せしとてとてとて人

なす人ききとて疎とてとてのれとてとて
人と侮とてびつとてとて志のきとてとてとて
とてえとてとてとてとてとてとてとてとて
際とて隙一心迷動とて切とてとてとてとて
とて身指とてとてとてとてとてとてとてとて
用ひとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとて先とては是とて義婦とてとてとてとて
とてとて心明とてとてとてとてとてとてとて

續々

二

正統と以て申は儉約とて身と金に
主欲として富せりと先は貧窮とて
貧乏人のこの不利害とては其は
是れも風定と志のけいせりて兼食
とては風定と志のけいせりて兼食
只こののさしとては其の志のふら
とては其の志と賢とて又孝とては又
母とては其の志と孝とては又母と

父母の心よ背は其身とて父母の心は
孝とては其の心の内も礼義とては
父母の教とては其の志とては又母
とては其の志とては父母の志とては
身命とては其の志とては父母の志
の難ようも是と孝とては其の志
和んとては其の志とては父母の志
とては其の志とては父母の志

のふりり

一層の法宗宣帝の時とや世言つてふよ
 親の血争ふ罪せしめく南海の志願よ
 おりしんといふ言う事あり董氏といふひ
 うんの洞神よ飾り居る流されぬ
 二よひおらんまもり又喜ばしとす
 なるまといふてうけと保ん人の命ハ
 ちつとぬかすくまき背よかへん

おほくすと又打師て歌しう去めてまな
 うしてあらん内ハきそて人よあといふ
 君の心とありめんてうとて縄と
 しつと髪と結び世言よ封とけとせく
 中根君よあははは死しよけ髪と
 とうとてうとぬ董氏ハそれと白
 紅粉とらひびきとがうといふ人よ
 まてくゆとてうの葉と摘糸とてお

孝志ト二十三年の春秋と送り貞忠
の操とまぬねたに公の大赦よけいし忠言
を還され家あへゆり母妻の正意とんて
まによろこびよ終守妻の誓とらんり
むしーの封乃まを御せらる礼い
のしらひ好し忠言の貞忠と感賞
孝心とよろこび別誓の封と解て指紙
入る也油と酒さ洗ひくぬるの誓扱取て

禿のこく如らり國歌の杖里との貞忠の
信と感し是と貞禿と唱し女の鏡として
世くううううて賞嘆しりり
一出羽の國を揚致仲和田村との所よ忠實
とつよ有徳なる百姓りりけ者一人の男子
とおりの名と忠又忠と号し子母又兼
よめるまくの隙々より妻と咄むく
け女官をうううくやまをうくとて

比翼の雙りの月よ一人の男子とさうけ今
の二方もある父母此露を祖父母のつと
とさうけさうけさうけさうけさうけさうけ
業因もさうけさうけさうけさうけさうけ
瘰癧もさうけさうけさうけさうけさうけ
日と遊てひまはさうけさうけさうけさうけ
膿血散もさうけさうけさうけさうけさうけ
又母親も側へさうけさうけさうけさうけ

人もこれ思れさうけさうけさうけさうけ
さうけさうけさうけさうけさうけさうけ
不敗まはさうけさうけさうけさうけさうけ
半二役も人もさうけさうけさうけさうけ
看病もさうけさうけさうけさうけさうけ
たまたまもさうけさうけさうけさうけさうけ
或時事もあるさうけさうけさうけさうけ
代へさうけさうけさうけさうけさうけ

續入新巻九

續入新巻九

鼻氣鼻とたり一^い家^かが^ら一^い悪^あふ^まえ^はに
たれと又母親をば家側へ去るを侍
いふんや他人へとあつくとあつるまゝに
夫婦のよしとあひひく様^けの身^みといと
ソ^だの^ん端^はみ^の方^{かた}に^は女^に抱^かの^は仕^し方^{かた}なり
世^よの^に女^に房^{はう}れ^及あ^らは^はる^は志^しの^の印^{いん}とせ
母^はく^あれ^しく^もた^らむ^はぢ^ぢや^り家^かあ^ひ
月^{つき}は^なな^なり^けは^は日^ひと^守神^{かみ}取^とて^令終^{つひ}

む^しと^いふ^ふ不^ふ思^し候^{けう}は^は令^{れい}す^まも^も人^{ひと}あ^ら
く^あら^はぶ^ると^まの^あ業^{ごう}周^{しゅう}も^も一^いり^りを^を判^{はん}察^{さつ}
深^{かん}家^かと^らり^ら本^{ほん}世^せと^助ん^んと^あり^り
あ^らは^はす^まの^かと^今の^い漸^{ぜん}十^{じゅう}八^{はち}は^あれ^は
末^{すえ}長^{なが}く^好家^けと^まん^んも^も一^いり^り今^{いま}ま^まの^の
く^くは^はと^つく^くの^の方^{かた}に^あら^はれ
日^ひふ^ふら^らぬ^ぬれ^れと^とく^く病^{びょう}の^のあ^らは^はれ^れ
へ^へま^まれ^れ今^{いま}令^{れい}の^のあ^らは^はら^らの^の方^{かた}に^あら^は

悲^ひしい^いうら^うら^いさ^さしい^い何^にも^もあ^あら^らず^ずの^のあ^あら^らず^ず
穀^こと^と母^{はは}の^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ず
子^こと^とい^いふ^ふは^は日^ひに^にま^まの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ず
志^しは^はお^おの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ず
月^{つき}日^ひの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ず
日^ひに^にお^おの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ず
魏^{わい}の^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ず

今^{いま}も^も改^{かへ}つ^つま^まあ^あら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ず
女^に抱^{かか}ら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ず
感^{かん}賞^{しょう}も^もあ^あら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ず
と^とい^いふ^ふの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ず
あ^あら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ず
ら^らん^ん胡^この^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ず
その^{その}う^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ずの^のう^うら^らず^ず

たむかふ事終らるるに世事の成るの事と
しれらるる世の成るに世事の成るの事と
けねとちとちうとちうにねねと座けとの法
意此は縁付の事也先しちのちやう
家立させてありねとがしひと移ひねえ
あらうの事とちとちうとちうとちうと
何座との事と自居たむかふも何とちう
りんねとちとちうとちうとちうとちう

しるゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさ
その方うゆさゆさゆさゆさゆさゆさ
娘の親くしゆいんとかう実子のとく
ゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさ
ゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさ
ゆさを境まてその貞節と感賞し女の
ゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさ
九条ゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさ

祖又祖母へ能つゝ母へ孝むとつゝ
村をたすの徳としんじむにたす村の
即ち如く家内懸案して今よめて夜業
ゆるし是ひくよちふ所う妻貞実の徳は
より天にあらまじりまのこ
一むし徳の言祖の臣よ王陵とつゝ者りり
ち孝ま一のものあくよく君と補佐一人
の老母りり戦士の初めは涙も田舎り

かろし徳で孝心よそひゆるは漢楚と
戦て楚軍王陵しあに利と失ひ涙く
王陵と恨し一つの涙よりけひるふ王陵
り母と中捕楚の陣中よ重人質しり
らに楚の陣中よ一人の智信ありて陵が
母の方いらく孫安よと送り楚よ父と
きて喜法に陵母もその情と感して去籍
と涙く志と悔ひりの恨けり心跡とあひ

この命令とまじりても扱ひぬをの命令大
本の一系とも尚らう今汝敵のい
名聲は皮城をのりて海軍の英氣
どくらの天下の安危は極せんや
大切なるおのり小半は抑り大事は
あやまら孝より忠の事とすれども
名ぶよして汝と泊るの深ささうら
高村楚王の暴無天下にまびるを神人

とにまじりて少くもくばとまじりて
大戦とすけり楚と亡して君民と安ん
じりて必りぬをのりてすけりて
言ふは誠は汝て死らうと後汝と死に
おさかんそれより志令石のまじりて
大功とまじりて是天下に掃りて義婦
よて末世の後とすけりぬ
一水國節のさるけり中は漢河系とすけり

古りくはよの戸を蕭のぬかに妻女を
せしむるも七夜もきくは青家の枕
うり居りて或日健りる男魚刀引
さげ産屋へ火込拵る義研は備へて
堪忍なりとて後身朋党と討てまは
跡より遊てうり居る危雨と切替は
まつり山を妻とらん掛る由の由
折るはかみ中もおんくちや入の役も

なぐ遊る火急よはるふは竹おろし
推糸のし拵る秋あは月よとて先令
今より一度は河を由圍る由り
世思のつる名はつるあはどり名を
取り秋は溪田に某る妻のまは江戸系
物りしるるあはくはる産とて
お礼し居る妻細くはるはるも
屋敷と泥りしはれはるはるはる

天長元年九月

十一

四

女子中り知ておもんそその大盜賊の
 通名とうらふがらやれまて勝負へ
 とせりしゆくはめをすれりやまやいうれ
 又後ゆもも向は法守此國を逃れもる存
 此不滅法の院いく急よも滞先くとまうし
 ほしく逃て海りる漸も志心まらぬ
 入るれを件の男とて今者いふれま
 此れもも此後のをり女子中の住居

なれんまへの義理世間れを思ふくは
 留中が喜つより悲ひて此出に方へも
 此處を去るゆと人と対し極子おとの名
 その者の性名ホとくとなす凡湯廣が
 去るるめさせ下女とて一つおの極子とん
 あやうきもあやうき女の業内と教へ妻
 門より出やうぬ皮男も法命れ思存く
 謝し産婦の佛と感賞し暇をくせぬ

ゆくものち下女も濡くはあてさうげ
あさけ情よそはらぬあつれ武士の妻を
きく人羨嘆して止さうらうら

一唐の水敦先生は法の人であるのうらに
清く言ふ楚の莊王をねとすて使を
令百弁と送うて居て相く玉の政次
あしとひ先生のいづくは春飾第とて
庭と庭子のつうひものわり軟くはれすて

幸と使んくえそ家ぐ妻のものと則ある
しうて云くは楚國より我とて相依の
友と何く國政とゆりゆり
今日我相位は歸くは駒馬車は宗方夫の
食食とそく茶花と語る名すと極し
汝のつうらまやと甲よ妻のいづく若は
く月と織て軽と世あひ粥と食してきり
ふと初る文は憂は苦くはひかりは物と治る

おれさうな之令り相の位は孫子駒馬
言蓋とがざり名さく相作必政の威
と釋しそれゆゑも樓半百回りの安し
はらうとらへ勝とつまにるに孫孫前ま
つらうその真とる一肉はさびれ法を
りうの安に一肉の味ひとん楚國の憂ひ
買はてて家方の苦しとせばそれかりま
よかしくちとひりねと先生のいさく國よ

君おふ市は極(り)とて遂はらう(あ)を
寸丈ぬつまで(あ)とくせしとけりまよ
ゆりしに賢女なりり
一相換も時教の母とへ松下の福尼(あ)りり
時教て下の執持とあひひれ(あ)乃
くまひひれ(あ)に福尼(あ)つと(あ)切て
すけらあ(あ)の(あ)れ(あ)ら(あ)切と
て(あ)ら(あ)ら(あ)の(あ)れ(あ)ら(あ)切と

りてそらん楊香より十年十にのびる
又田たよりんとして出たり不肖なるし山田の色
よりぬきぬきし見歩あゆりしまたらまらたを
くおろりし虎とらはもあつ又揚香より
しんと揚香られしとんく大きよおられ
悲かなしむねぞすしきやうなむきしうらぎ
ららららむても又とくし事のかた
さうし自みづかり虎の首くびにれけいのけの尾おしよ

天あま乃のまのり又の命いのちよりんねし
そのまのあしからふそのころりて天
乃のも通とほししは虎とら大きふ必かならず神かみよて
耳みみよりを尾およとめ遊あそびらる又ハ娘むすめよ
物ものんかや子こよりらもあやうき命いのちよりん
つうねきしとよらうしひあくおまうらぬ南みな
御おん孫まごの太ふとき匿かく撃げきしり人ひとは事ことん
まはゆく奇き物もののまよおし別わか視み香かとて

米百石とありて 獲兵衛と申しのちと歌い
つとらりて 一也まことに若りの花に
きとがくのこゝろがたに
一申じし 右近うぢのすけ女むすめを 女房内裏むすねと
くもつその身みは内侍うちわらひの首くびを 月防つきぼしの
國司くにすけと娶むすうて一人の娘むすめとくはじき
ひかりりふきふひ宮殿みやだん英ひ麗びとて
くまのりて 月防つきぼしの内侍うちわらひとくはじき

申と詔みことたまはりたるより 孝たか忠ただありて 佛ほとけ林やしん
とくひつくりくもつて 一は 娘むすめとくらの妻つまと
うや母ははの右近うぢ保たもなす 一人ひとりの面おもて成なり
ひくもつて 一は 娘むすめの父ちちの死しに
娘むすめとくらの妻つまと 一は 娘むすめの父ちちの死しに
大内おほうちの御ご女むすめとくらの妻つまと 一は 娘むすめの父ちちの死しに
あつて 一は 娘むすめの父ちちの死しに

方より八がしやけの清い清き事とてくはは典
第身の前もしつゝおまうありは月日にかゝる
ゆけしものりしきりしきまのくひをねん大
和國初瀬寺の観音くわんおんとてまよと
しめふとすつて初瀬はつせとて七日と
りり多くしものまうしなく物きけりから
肉は淨土じゆつどのみこととてたこのことよりあまると
るまうしにこそなるありあつたる物ものひよて

壇だんをおらり幣切へいぎりけ供物くわつものとてけ珠板じゆばんお
しして移うつくの秘法ひぽうとてしる系けい神かみ息いき
よ移うつせよひてはしるぬしぬとて神かみ号ごう
うとていりく
さねの母ははよりうりしつゝこれひひと
ましてまふふとひりしるきり
とてしるしけりしきざりの社やしろ七なな夜やせ
乃すなは時ときよりしるるけりしるきりしる

神あり〜せあづこの昔もあまうりや
らねひ〜は親喜れしつげ〜れ〜
う〜め〜て母らまたね〜らうまひ
母との代系は内侍らう〜只ひらう
乃山流とい〜りのと〜母の時は也船の
此社はま〜であひ深〜新〜意〜なりあ
南守やさ〜の大明神様う〜いむ多しの
慈恵〜これ我母の病とい甲〜て〜び〜と

あし〜と〜〜伏〜ね〜か〜ん〜
歌〜つ〜〜を〜一人燈の枝は〜ら
ま〜あひ娘は〜び〜て〜のマ〇や
親のま〜と〜は〜天の加護〜
今昔と〜らた〜り〜ら〜れ〜宗
宮の内は〜備〜ひ〜て母の終と満つ玉祥ハ
氷は脚て臭と〜ら〜ら〜る〜法〜
玉のな〜り〜作〜母の母が〜生〜

將國の女も食なり〜も兼文の人〜
おど〜ひ〜ひ〜えぬ〜も〜あつ〜
人のあ〜も〜ひ〜も〜
併明より〜
せれ内侍もは〜
よて今〜も〜あひ〜
と〜あ〜も〜
金〜の〜
告〜ひ〜
明〜

汝も孝心と感〜
り〜
海〜
母の瘵病〜
の〜
目防の内侍〜
奈の奥院〜
と〜人〜

いふもよとく女のみこゝしてはひさしく
 あらうと記考はなる
のち右漢明りし貞義賢孝の徳を
一和清いつまよとの徳より出ず先より
あはれよりく清け無へは道は徳とみんをさるゝ
 へりて希りし是はこれ徳をひらの
よなりひけたともぬあはれひひやちまは
ひ孫つらうつらうす希くはては徳のま

めくふふ下よまぎひの徳の徳よて
 人の徳とけりまふまては徳をひら
 ぬ事とてかりし徳をひらぬ徳を
 したる徳もやせ今まて徳をひらぬ
 事なはれぬ徳をひらぬ徳をひらぬ
 今日此今より徳改けぬ徳をひらぬ
 徳をひらぬ徳をひらぬ徳をひらぬ
 徳をひらぬ徳をひらぬ徳をひらぬ

續人卷九終

多くよつて其の如く人
月よつてぬ神も佛ともいふ

及のまゝに其の如く

其のまゝに其の如く

其のまゝに其の如く

其のまゝに其の如く

續人卷九終

諸列傳法

信来

